

# 「他者とのコミュニケーション」への分析視角 翻身と準拠関係性

## The Analytical Aspect into 'the Communication with the Other' The Alternation and the Reference Relationship

渡辺 牧\*  
Osamu Watanabe

### I. 序

本稿の目的は、筆者が継続研究中の翻身 (Alternation) 論に関し、解釈枠組の基礎的検討を図ることにおかれている<sup>(1)</sup>。

はじめに、翻身に関する仮定的な定義としては、かつて設定した「個人の内面世界の変容に根ざした生き方の変更」という定義を、そのまま本稿でも踏襲する (渡辺 [1984: 64-77])。

人間が社会的存在である限り、翻身とは、他者の発見、他者とのコミュニケーション問題に接続ないしは、包摂される研究課題である。以下では、この問題への1つの分析視角の検討をめざしている。

言うまでもなく、翻身現象とは、極めて複雑で、例えば「宗教上の回心」や「政治思想上の転向」が象徴的なように、多くの位相が交錯する、人間的、社会的現象であろう。複雑な現象であるからこそ、筆者は、この間、個人生活史に対するききとり調査や、文献調査といった経験的実証的調査研究を進めてきた。実証的データに基づく、「もっと経験的研究」の蓄積が重要なのである<sup>(2)</sup>。しかし、同時に、①そもそも初発の基本的発想に対する問い直し作業、②翻身研究に対する分析視角の検討、③解釈枠組  
\* 一般教育等

の検討——などを、調査活動とすり合わせするような形で進めねばならない<sup>(3)</sup>。

翻身研究は、経済、社会変動などを射程にいれながら、個々人の生き方に影響を及ぼす次元での準拠関係性 (Reference Relationship) の分析が、重要な意味をもっていよう。さらに、経験的調査研究上の課題としては、翻身は、個々人の主観的経験世界に根ざした形で発生する現象である。翻身の解明のためには、調査研究の方法論的革新が不可欠である。

このため、本稿では、T. シブタニ (T. Shibutani), R. L. シュミット (R. L. Schmitt), J. ウリー (J. Urry) らの相当に独創的な論考をまず検討したい。そのうえで、彼らの研究からの批判的摂取を叩き台として、翻身現象をめぐる経験的研究への架橋をめざしたい。

### II. 自由主義社会における翻身研究の意義

ここでは、翻身研究の意義についてふれておきたい。集約すると、第1の意義は、「生き方の変容」をめぐる多様な道筋に対する社会学的相対化の作業に関連していよう。「生き方」というものは、個々人1人1人にとって個性的であり、百人百様の軌跡がうかがわれる<sup>(4)</sup>。「生き

方」を左右する〈価値〉は、ある人には絶対に譲れない価値であっても、他の人には重要性の薄いものであることが少なくない。例えば、株式市場の動向、日本経済の景気循環は、投資家、経済人にとっては最大の関心の対象であったとしても、トカラ列島の孤島で、《野の道》を歩いている1人の詩人には、関心外のできごとにすぎない<sup>(5)</sup>。

翻身研究を通じて、「生き方の変容」に関する体系的な成果が当面、達成できるとは考えていないし、体系の追求はさしあたり、筆者の関心の外にある。社会学的な相対化作業の、翻身研究における意義は、「誰もが社会における自己の行為について自分に問いかけよ」という要請に対し、たとえわずかずつであれ応答するきっかけとなるのではないか、という点にある(Berger [1963→1979:14])。

同時に、翻身研究は、感受性と洞察力に優れた1人の社会学者が提起している、つぎの可能性にも接続していよう。

「社会学の魅力は、今までの人生を通じて生き続けてきた世界を、社会学の視界によって新しい光の下で見直すことを可能にしてくれることにある」(Berger [1963→1979:34-35])。

第2の意義は、日本や米国、英国、仏国など、自由市場経済(liberal market economy)に立脚した社会固有のものである。自由市場は、L. V. ミーゼス(L. V. Mises)が述べているように、形而上学的観点からみれば、完全な自由をもたらしてはいない。良好な雇用機会が稀少であるといった問題点もみられる。しかし、自由市場経済は、職業選択の自由や、地位の移動の自由といった、開かれた機会を提供してきたことは事実である<sup>(6)</sup>。

言い換えれば、自由主義社会は、個々人が、自らの価値や志向性をもととして、「自分の生き方を選べる」ということを、基本原理としている(Mises [1979→1980:33-42])。その文脈にお

いては、翻身研究は、個々人の「人生のチャンス」(Life chance)という問題に接続していよう。ある個人が、「自分が自分らしく生き生きと生きたい」と切望し、そのチャンスをいかなる道筋で発見し、人生の転換点としたのか？ チャンスを阻害する諸条件を、いかにして克服して、自らの道を切り拓いたのか？ あるいは逆に、いかなる要因によって、自己実現への旅路が阻害されたのか？ このような視点からの翻身研究は、社会学をもっと血の通った、人間くさい、そして実践的な学として発展させてゆくことにつながっているとみる。

### Ⅲ. 翻身論をめぐる視点の検討

翻身論は基本的には、人間の生き方をいかに社会学的に分析してゆくのか？という問題に接続している。これまでの生き方論を、図式的に類型化すると、①超越的な価値を重視した啓蒙主義的生き方論、②実生活の荒波に直面し、乗り越えてゆくという文脈での生活者としての生き方論、③マーケティング的発想に立つ、消費喚起を主目的とするライフスタイル論などに分けられよう。これらのうち、少なからぬものが、生き方、人生の目標を、ある一定の価値をもととして、人々に呈示してきた。これは、価値の定立であり、ある価値の主張にほかならない。

これらの問題について考えてみよう。「かく人生を生きるべき」と言う際には、すでにその時点で、人生の目標が固定的に設定されている。仮に、こうした提言を全面的に受け入れて生きるとすると、それ以後、人間は変わりようがない。言い換えれば、自己を取り巻く社会的世界の諸規範、諸価値を自明視して、生きることになるのではないか？

E. フッサール(E. Husserl)は、現象学研究において、Noesis(志向作用)とNoema(志向対象)という対概念を呈示している(Husserl [1936→1970])<sup>(7)</sup>。生き方の変容をめぐるには、究極的には、NoesisとNoemaの弁証法的解明が求め

られよう。しかし、さしあたり、筆者は、Noesis の解明にこそ焦点をあてたい。なぜならば、「人生の目標」といった生きてゆくうえで大きな課題が、果たして先験的に呈示可能であるのか？という疑問があるからだ。

暗闇のなかで、あたかも手探りを繰り返すかのようにして、試行錯誤を続けながら、「自分の人生でもっとも大切なことは何か？」を問い続ける日々の営みの過程にこそ、自他の生き方をめぐる問題解決の鍵も、あるいは阻害要因も潜在しているのではないのか。これは、本研究の背後仮説である。Ⅱ章で述べたように、〈生〉の志向対象として何を選択してゆくのか——は、自由主義社会においては、個々人の自己責任と自由に委ねられている。こうした前提から、翻身論は、個々人の志向対象が明示的であれ黙示的であれ、「生きることの過程」にメスをいれる社会学的作業の一環として位置づけられるのである。

#### N. T. Shibutani の準拠集団論

##### 1. 米国社会学における準拠集団論への関心

以下では、T. Shibutani の論文「パースペクティブとしての準拠集団」を中心として、検討を進めよう。(Shibutani [1955:562-569])。

Shibutani は、個人が1つの社会的文脈から別のそれへと移行するような、行動の変化は、準拠集団の変化に即して説明されるとしている<sup>(8)</sup>。例えば、少年非行者の英雄的行為は、同輩集団のギャングたちから彼に寄せられた期待によって説明される。準拠集団論は、選択対象(alternatives)をめぐる選択行為を説明する際に、とくに有効であった<sup>(9)</sup>。

シンボリック相互作用論の理論的中核と目されてきた G. H. Mead は、人間相互の対立や葛藤よりも、調和の方に主眼をおいていた。その背景としては、19世紀ドイツ・ロマン主義思想との共通性や、20世紀初めの米国における明るい未来への予感、プラグマティズム思想の影響などがあげられている(椎野 [1978:44-55])。

これに対して、T. Shibutani は、個々人のパースペクティブが、大衆社会状況のなかで引き裂かれ、葛藤に陥っていることに着眼している。彼は、現代社会が多様な社会的世界から構成されているとみる。このため、個人は多数のパースペクティブを内在化するようになる。

Shibutani は、米国の社会学において準拠集団論への関心が高まってきた理由として、つぎの3点を呈示している。

第1は、大衆社会においては、人々は、直接、参加していない集団の基準をしばしば用いるという点である。第2は、個々人は複数のパースペクティブを内在化することによって、「板ばさみ」(dilemma)に陥っている。第3は、客観的な社会構造よりも、集団生活の主観的側面、集団への参加者の「経験」が、社会心理学において重視されてきたことである。

これらの関心の背景には、大衆社会の文化的多元主義の進行がみられる。Shibutani は、その裏面で、同時的に、統一的コンセンサスの解体现象がみられることに着眼していた。

##### 2. Shibutani の準拠集団概念

Shibutani は、準拠集団概念の従来の使用法として、つぎの3種をあげている。第1は、自己の地位を価値評価するための比較点として役立つ集団である。第2は、行為者が参加することを望み、あるいは、参加を継続することを望む集団である。第3は、集団のパースペクティブが、行為者の準拠枠を構成することを意味する集団である。

彼は、以上のなかで、第3の使用法を選択すると、明言している。行為者の「経験のメカニズム」に対して切りこんでゆくために、彼は第3のやり方を選んだ。この点について、彼はつぎのように説明している。「集団への直接的あるいは代行的な参加を通じて、人は、その観点から世界を知覚するようになる。しかし、この集団は、人が受け入れを願うものである必要はない」(Shibutani [1955])。

彼は、1961年公刊の著作‘Society and Personality’において、準拠集団概念をつぎのように定義している。

「現実のものであれ、想像力の次元のものであれ、その集団の観点が行為者によって、準拠枠として用いられている集団」(Shibutani [1961:257])。

彼の定義から摂取すべき点としては、準拠集団論を、想像力の次元へまで拡大再定式化することを志向していることである。彼の視点は、準拠集団論が、集団を過度に実体化視しがちな傾向の克服に向けられている。

### 3. コミュニケーション・チャンネルの問題

Shibutani は、W. I. Thomas の「個人の行為は、彼の情況定義 (the definition of the situation) に依拠している」という有名な定式化を、大衆社会状況下での米国のコミュニケーション・チャンネル問題に接続させている<sup>(10)</sup>。

具体的には、Shibutani は、コミュニケーション・チャンネルの増大と多元化を、例えば、新聞や雑誌などのマス・コミュニケーションの発達や、他の人々および多くの集団との接触の多元化から、つぎのように説明している。

「共通のパースペクティブ——共通の文化——は、共通のコミュニケーション・チャンネルに対する参加を通じて、立ち現われる。しかし、この事象のもつ意味は、大衆社会に対する分析では、十分に評価されてこなかった。人々の見解のちがいは、人々の接触の差異や、関係する集団の差異から生じている」(Shibutani[1955])。

彼は、W. I. Thomas の定式化をさらに拡張させて、「異なった見解を有する人々は、環境に対し、選択的に反応しつつ、同一の情況をちがった形で定義する。例えば、娼婦とソーシャル・ワーカーは、同じスラム地区を歩いたとしても、異なったできごとに注目するようになる」(同上)と述べている。

さらに、Shibutani は、人々の関係性を隔て

ている「社会的距離」(social distance)を、物理の次元での距離ではなく、コミュニケーション・チャンネルの分断および多元化として考えていた。

「それぞれの社会的世界は、1つの文化的エリアにはかならない。その境界は、形式的な集団成員性によってではなく、効率性を軸としたコミュニケーションの境界〔限界〕によって設定されている」(同上)。

Shibutani によれば、すべての社会的世界は、それぞれ独自のコミュニケーション・チャンネルをもっている。例えば、ギャングや麻薬販売人など、「地下世界」(the underground)の人々は、秘密のコミュニケーション・チャンネルをもち、さらには、彼ら間でのみ理解可能な隠語を用いて、情報交換している。また、各コミュニケーション・チャンネルが、分離した世界(separate world)を勃興させてもいるのだ。

### 4. 情況定義とパースペクティブ選択

大衆社会において、人々は、多様な社会的世界に同時に参加している。しかし、人々は、複数の社会的世界間での葛藤と矛盾を、常に意識化している訳ではない。

この意識化の契機について、Shibutani は、つぎのように述べている。「人々は、矛盾した要求が彼らに対して出される状況内に継続的にとられるときにのみ、異なった見解の存在を鋭く留意するようになる」(Shibutani[1955])。

彼は、情況を定義する際の個人のパースペクティブ選択を、重要な問題としてあげている。この問題は、「重要な他者」(the significant other)に対する忠誠という問題に接続していると、彼はみている<sup>(11)</sup>。

一方、統合の度合の低い社会では、複数の社会的世界間の葛藤に、個人は引き裂かれやすい。また、社会的世界間のいわば裂け目に生きるマージナル・メン(marginal-men)問題に対しては、ニグロの知識人、混血の子供、移民の子供などの例をあげて、つぎのように言及してい

る。「彼らは、分断化された生活を通じて、自分の道を作り出そうとしている。しかし、個人的不適応が明らかに頻繁に生じている。極端なケースになると、健忘症と人格解体がみられる」(同上)。

Shibutani は、大衆社会における人々の行動に対する研究課題として、つぎの3点を呈示している。第1は、人々はいかにして状況を定義しているのか?である。第2は、情況定義の際のパースペクティブ選択の問題である。第3は、個人の情況定義にとっては、オーディエンスからの確認や支持が必要である。このため、オーディエンスの解明が課題点となってくる。

さらに、彼は研究の焦点として、①行為者が他者に寄せる期待、②行為者が参加するコミュニケーション・チャンネル、③行為者が同一化をとげてゆく人々との関係性——という3点を呈示している。

Shibutani は、個人のパースペクティブ形成を、準拠集団概念から説明することを志向した。コミュニケーション・チャンネルの問題への関心など、彼の発想のユニークさは、今世紀の大衆社会化現象に対する事実認識の鋭さによる面が少なくないだろう<sup>12)</sup>。

## V. R. L. Schmitt の準拠他者論

### 1. 包括的な解釈枠組への志向

T. Shibutani, R. H. Turner らに続いて、1970年代に入り、R. L. Schmitt, J. Urry らの準拠集団に対する新たな研究成果が公刊された。

R. L. Schmitt は、これまでの広範な準拠集団研究をレビューしたうえで、準拠集団概念をさらに拡大再定式化させ、包括的な解釈枠組形成を志向した。論者によって定義がまちまちな準拠集団概念を、その拡散ゆえに放棄するのではなく、彼は、個別研究を1つ1つレビューし、その作業をもとに、包括的な解釈枠組形成に向かったのである。その意味で、彼の研究方法は、漸進的アプローチ (piecemeal approach) と言えよう。彼の研究は、準拠集団論の学説史

上、大きな意味をもっていると思われる。

### 2. Schmitt の準拠他者—準拠関係性論の発想

Schmitt は、個人—他者関係の類型論構築をめざしている。彼は、その背後の公準として、H. Blumer の「感受概念」(sensitizing concept) をあげている<sup>13)</sup>。

「ブルーマーは、社会科学における諸概念が、必然的に感受的なものであることを示唆した。これは、社会学者が、彼が検証したいと願う“現実世界”(real world) の一部分を、単純化した形で、あるいは限定的な形で記述することはできないことを意味している。なぜならば、諸変数は孤立して存在していないからである。これらをめぐる妥当な記述は、これらが立ち現われる setting の考察を前提としている」(Schmitt [1972: 40])。

Schmitt は、G. H. Mead を理論的中核とするシンボリック相互作用論の影響を大きく受けている。このため、準拠他者論の発想としては、機能主義的視点ではなく、主体の経験の意味、主体の解釈過程の複雑性に着目している。個人の意思や行為は、社会文化システムによって全面的には決定されえないと、彼はみる。「個人の準拠諸関係の発展のなかで、社会文化システムは自我に対し、何らかのフレキシビリティを与える。準拠諸関係の複雑さは、自我を葛藤する諸状況におく。だが逆説的には、この葛藤こそが、自我に何らかの選択を与える。(中略)個人はまた、創造的方法で、社会システムに反応する能力をもつ」(Schmitt[1972: 182])。

### 3. Schmitt の準拠他者論の基本的枠組

Schmitt が準拠他者研究で依拠した理論は、自己理論 (self theory)、役割論、シンボリック相互作用論である<sup>14)</sup>。彼は、シンボリック相互作用論が、前の2理論と準拠他者志向 (reference other orientation) 問題とを包含する可能性をもつとみている<sup>15)</sup>。

表1 これまでの準拠集団概念のレビュー (R. L. Schmitt [1972: 41-44])

Source	Concept	Meaning
H. H. Hyman (1942)	準拠集団  準拠個人	現実的あるいは実体化された集団あるいは人々の自我の諸カテゴリーは、彼自身を、彼が重要として知覚する諸地位に関し比較させる。  特別な、そして決定的な個人の自我は、彼自身を、彼が重要なものとして知覚する諸地位に関して比較させる。
S. A. Stouffer & associates (1949)	相対的不満	アメリカ兵は、彼が彼のサーヴィスの地位を、他者たちのある諸カテゴリーと比較した故に、不満を感じた。
T. M. Newcomb (1950)	肯定的準拠集団  否定的準拠集団	個人が成員性の地位を望み、彼が受容する規範をもつ集団  個人が対立し、彼が排斥する諸規範をもつ集団
H. H. Kelley (1952)	準拠集団の規範的機能  準拠集団の比較機能	自我のための諸規範をセットし、押しつける集団あるいはカテゴリー  自我が彼自身と他者たちを価値評価する集団あるいはカテゴリー
H. Gerth C. W. Mills (1953)	親密な他者たち	彼の自我のイメージに対し尊ばれ望まれた (prized or aspired) ものに最大の確証を貢献するものとして、個人によって知覚される、ごくわずかな重要な他者たち
M. Sherif C. W. Sherif (1953)	準拠集団	彼が心理学的に、彼自身を関連づけることを望むもの、あるいは、その一部分として、彼自身を関連づける集団
E. Bott (1954)	直接的準拠集団  構成された準拠集団	諸規範が、直接的に、自我によって内在化される現実の集団  構成された集団への諸規範の投影の量が高い概念あるいは社会的カテゴリー
S. N. Eisenstadt (1954)	準拠諸規範 準拠志向	自我の行動と知覚に影響を及ぼす一般的諸基準 特別な諸状況で用いられる準拠諸規範
T. Shibutani (1955)	準拠集団	“他者”のパースペクティブが、自我によって、彼の知覚場の組織での準拠枠として用いられる。
R. H. Turner (1956)	同一化準拠集団 相互作用準拠集団 価値評価準拠集団  オーディエンス準拠集団	この集団は、自我の諸価値の源泉 集団自我は、単に彼の諸目的達成のために重視される。 同一化準拠集団によって、重要なものとして定義される諸集団  自我が、彼の役割遂行を、観察され、価値評価されたものとしてみる集団
S. Rosenman (1957)	支配的な内在化された他者	有機体の内で、意識しない権力者が、支配的位置への道を打ちのめし (battle) たり、あるいは言い抜ける (chicane), 侵入しつつある成像 (A “trespassing” imago)
R. K. Merton (1957)	準拠個人 役割モデル	いくつかの役割で、自我に重要な影響を及ぼす人 一つ、あるいは二、三の役割において自我に重要な影響を及ぼす人
W. W. Charters, Jr. T. M. Newcomb (1958)	成員性集団のセイリアンス (salience)	成員性集団が人の関心に呈示される程度

Source	Concept	Meaning
E. Q. Campbell T. F. Pettigrew (1959)	自己準拠システム 職業的準拠システム 成員準拠システム	外的諸源泉からよりむしろ、自我の自己概念から生じる影響 個人の職業的役割と相互に関係した、いくつかの選定された諸源泉から生ずる影響 自我の選定された成員諸集団の一つから生ずる影響
J. M. Jackson (1959)	選好集団	人が肯定的に一集団の成員性にひきつけられるが、一成員としては受け入れられない。
Ithiel de Sola Pool, I. Shulman (1959)	準拠オーディエンス	自我が思考するところの諸オーディエンス
F. E. Merrill (1961)	ダイレクト 直接的他者 媒介的他者  イデオロギカルな他者	個人が自分自身を知覚する際に、媒介とする直接的他者自我がそのときに現実的にはコミュニケーションしていない人々あるいは諸集団。しかし、それらの真の、あるいは仮定された諸判断は、彼の自己判断に影響を及ぼす。 所与の時に特定の信念を特徴づける一般的パターン
L. Plotnicov (1962)	固定された成員集団 フレキシブルな成員集団	成員の間の連帯性の紐帯に立脚した永久的諸集団 外的諸目標によって特徴づけられた諸集団
S. A. Stouffer (1962)	報酬諸集団	成員あるいは願望する成員 (aspiring member) に対し、肯定的あるいは否定的報酬を行使するための力をもつ諸集団あるいは諸カテゴリー
E. Q. Campbell (1964)	インターナライザー 内在する者 アイデンティファイア 同一化する者	彼が諸規範を内在化した故に、それらに従う人 重要な他者たちの願望と結びついているが故、諸規範に従う人
M. Kuhn (1964)	オリエンティショナル・アザー 志向的他者	自我が情緒的かつ心理学的に関与する他者。この他者は、自我に、彼の一般的ボキャブラリー、自己概念、そして社会的諸目的を与える。
T. D. Kemper (1966)	準拠群	彼が行為するとき、自我が考慮する他者たちの総計
N. K. Denzin (1966)	役割特定の重要な他者	役割コンテキストの中で、自我のために重要な他者

また、役割論は社会構造の分析に、自己理論は個人の次元での分析に、さらに準拠他者志向論は、社会システムと個人の間の社会心理学的結合に対し、それぞれ焦点をおくとみている。

Schmitt は、人間モデルとして、①社会化された有機体の決定的性質、②社会システムから自由な存在——の2種をあげ、彼の見解は、人間は creature and creator of his culture だとしている。すなわち、自我が社会文化システムに影響されるとともに、自我がこうしたシステム

に対し反応してゆく創発的側面を重視している。

つぎに、Schmitt の考え方で注目されるのは、準拠他者が経験的実在である場合と、そうではない場合とを分節化し、後者に対しては、現象学的パースペクティブを導入していることである。

彼は、準拠他者のカテゴリーの1つとして、「想像上の準拠他者」(the imaginary reference other) をあげている。「自我が、準拠他者を象徴

化できるという事実が、現象学的枠組を重要なものとするすべてである」(Schmitt[1972:181])。

Schmitt は、個人—他者関係性は、「準拠他者」、「準拠関係性」、「個人」の3基本要素で特徴づけられるとして、表2にみるように、包括的類型論を呈示している。彼は、「準拠他者」を、経験的地位、成員性の地位という2次元からとらえている。前者においては、「準拠個人」、「疑似経験的準拠他者」、「想像上の準拠他者」に分節化している<sup>16</sup>。

さらに、「疑似経験的準拠他者」を、「準拠集団」、「準拠カテゴリー」、「準拠規範」、「準拠自己」、「準拠対象」に再分節化している。

Schmitt が、個人—他者関係性を前述の3基本要素でとらえたこと、さらに各要素を分節化したことは、準拠他者論の分析装置を発展させるための基礎的役割をもつものであった。つぎに、彼の「準拠関係性」に関する論点をみよう。

#### 4. 準拠関係性

##### (1)同一化対象の準拠関係性

Schmitt は、同一化対象の準拠関係性(The Identification Object Reference Relationship)を定義するうえで、個人の準拠他者に対する感情(a sentiment)を重視し、つぎのように説明を加えている。「感情とは、自我が準拠他者に対してもつ感情の状態(feeling state)をさしている：それは、準拠他者が自我に対して意味するものを反映している」(Schmitt[1972:60])。さらに、彼は、この関係性をつぎの2種に分節化している。

(A)準拠他者に対する自我の感情が肯定的あるいは支持的な場合→肯定的同一化対象の準拠関係性(a positive identification-object reference relationship)。

(B)準拠他者に対する自我の感情が否定的あるいは支持的でない場合→否定的同一化対象の準拠関係性(a negative identification-object

reference relationship)<sup>17</sup>。

彼は、「準拠他者」との関係では、同一化対象の準拠関係性からは、「準拠規範」と「準拠自己」は、経験的な地位次元では、おそらく除外されるべきだ、としている。また、成員性の地位次元は、準拠他者が個人、集団、あるいはカテゴリーの場合に含まれよう、と指摘している。

Schmitt は、準拠集団研究のレビューを通じて、H. H. Kelley, T. Shibutani らが、同一化の次元(the identification dimension)を、準拠諸集団の規範的機能のもとに包括してきたことを指摘し、「同一化は、諸規範の内面化(the internalization of norms)のためのメカニズムとしてみなされてきた」と言う。

これに対し、彼は、同一化変数(the identification variable)を規範的次元から分離するための理論的基礎と、同一化対象の準拠他者について、つぎのような説明を加えている。

第1には、準拠他者との自我の肯定的同一化は、しばしば、規範的影響に先行する。だが、このことは常に真実とは限らない。内面化は、同一化を必要条件としない。自我は、規範の受容ゆえに、規範を内面化しよう。

第2は、同一化はしばしば規範的影響を導くが、これも常にそうだとは限らない。この点は、準拠関係性の変化の解明にとって、とくに重要である。

第3は、準拠他者は、同一化対象の準拠関係性において、自我にとっての関心の主要対象である。

Schmitt は、自我の黙示的あるいは明示的側面が準拠他者に対して働きかけられるという点を重視したうえで、「自我と準拠他者たちとの双方向の関係性(two-way relationship)はまだ十分に、概念的レベルでは解明されていない」(Schmitt [1972:62])という。「準拠他者は、自我との関係で、従属変数か独立変数のいずれであるか、あるいはその双方である」との認識のう



えで、彼は、この複雑性は、同一化を単に内面化のためのメカニズムとしてみることで解明されないと指摘する。

## (2)規範的準拠関係性

規範的準拠関係性 (The Normative Reference Relationship) は、個人の明示的もしくは黙示的行動が、準拠他者に固有の規範、価値によって影響される場合にみられる。Schmitt は、この関係性について、H. H. Kelley, T. Shibusaniら、これまでの準拠集団論における定義とのちがいについて、つぎの諸点を呈示している<sup>18)</sup>。

第1は、H. H. Kelley の定義は、準拠集団に限定されていたことである。Schmitt の定義は、準拠個人、疑似経験的準拠他者、想像上の準拠他者という3類型を包括している<sup>19)</sup>。

第2は、Kelley の定義は、諸規範を設定し、強制するという文脈で、準拠集団の能力を強調している。Schmitt の定義は、自我が、準拠他者の意図とは無関係に影響されるということを強調している。

第3には、Kelley は、成員集団のみが自我に対して、規範を呈示できると示唆している。Schmitt は、規範的影響の潜在的源泉として、成員と非成員双方の準拠他者を考えている。

第4は、Kelley と Shibusani は、規範的影響は、同一化を必要条件とすると仮定している。Schmitt は、この仮説を採用しない。

第5は、Kelley と Shibusani は、同一化が規範的影響を導かない場合には、同一化は重要な意味をもたない、とみている。Schmitt は、この仮説を採用しない。

第6は、Kelley も Shibusani も、規範的準拠集団の定義に対し、自我の知覚 (ego's perception) を包括しなかった。Schmitt は、これを包括している。

第7は、Shibusani は、自我が、準拠他者のパースペクティブに適応、あるいは内面化しなければならないことを指摘している。Schmitt は、この仮説を採用しない。

## (3)比較準拠関係性

Schmitt は、Kelley が、比較準拠集団という用語を用いて以降、さまざまな論者が、「それは準拠集団として、みなされるべきではない」と論じてきたと指摘している。これらの論者の基本的前提は、「比較準拠集団は、規範、価値、パースペクティブの源泉ではない」ということであった。彼は、こうした見解に対して、「我々は、この理論的基礎に同意する一方で、比較準拠他者は個人に対して影響を及ぼしている」と述べている<sup>20)</sup>。

彼は、O. E. Klapp の著作から、つぎのように引用している。「現代の豊かな社会における反乱は、人々の相対的剝奪という感覚が累積した欲求不満に対する反応である。相対的剝奪という感覚は、人々の現状と、人々が自己および他者の爆発するように強烈な期待との比較や、アイデンティティに対する象徴的な障壁から生じている」(Klapp [1969])。

Schmitt は、「比較準拠他者の有意性 (relevance) を記録しようとするどんな企ても、自己に関する言及 (a mention of the self) を要求している」と述べている。彼は、自己評価 (self-appraisals) 研究に対する比較準拠他者のもつ役割は、まだ十分探求されていない、としている。

## V. Schmitt の立論の検討

以上の Schmitt の論点の跡づけ作業からは、準拠関係性をめぐる経験的調査研究に対して示唆される点は大きい。ただし、Schmitt の立論では、「好きか嫌いか」という感情 (a sentiment) 次元に根ざしている「同一化対象の準拠関係性」と、規範、価値次元での「規範的準拠関係性」との相互関連性は、日本社会と日本以外の東アジア社会、あるいは欧米社会との比較社会論的な経験的調査研究抜きでは、明示することは困難であろう。自我包絡が社会構造といかなる関連性をもつのか？ この問題に対しては、比較社会論的な分析視角が不可欠となる。

表2 個人—他者の類型論 (R. L. Schmitt) [1972: 49-51]

準拠他者：個人に影響を及ぼす他者

(1)経験的地位：

- (1-A) 準拠個人：準拠個人は自我 (ego) に影響を広げる現実の人
- (1-B) 疑似経験的準拠他者 (The Quasi-Empirical Reference Other)：ある意味でリアルであり、ある意味ではリアルでない他者
  - (1-B-1) 準拠集団：自我に対して影響を広げつつある現実の集団
  - (1-B-2) 準拠カテゴリー：自我に対して影響を広げつつある社会的又は統計的カテゴリー
  - (1-B-3) 準拠規範：自我に対して影響を広げつつある外的規範
  - (1-B-4) 準拠自己 (reference self)：他者の象徴的役割において、彼自身に対して影響を広げつつある自我であり、彼自身
  - (1-B-5) 準拠対象 (reference object)：彼に対して影響を広げつつある、自我にとって特に重要な社会的対象、事物 (a thing)、クォリティー、できごと、あるいは事柄の状態 (経験的な地位次元のもとで考察された準拠他者の他の諸タイプおよびサブタイプを除いて)
- (1-C) 想像上の準拠他者：自我に影響を広げつつある、リアルではない他者 (unreal other)

(2)成員性の地位：

- (2-A) 成員性の関係 (Membership Affiliation)：自我は、彼が準拠他者との成員性関係をもつものとして認識されるならば、準拠他者との成員性関係によって特徴づけられる。
- (2-B) 非成員性の関係

準拠関係性：準拠他者が個人に及ぼす影響のタイプ

(1)準拠関係性のタイプ

- (1-A) 同一化対象の準拠関係性：準拠他者に対する、個人の肯定的あるいは否定的感情の程度が、対象としての準拠他者に対する彼の明示的あるいは黙示的行動を導くのに十分な場合に存在する関係性
- (1-B) 規範的準拠関係性：個人の明示的あるいは黙示的行動が、準拠他者の特徴的な、あるいは準拠他者に帰属する諸規範、諸価値によって影響される場合に存在する関係性
- (1-C) 比較準拠関係性：個人が、自己を何らかの次元で準拠他者と比較し、明示的あるいは黙示的マナー (manner) のいずれかで影響される場合の関係性

(2)準拠関係性の範囲 (the scope)

- (2-A) 同一化対象の準拠関係性の範囲：(1)自我が準拠他者に対して保持する感情の強さ、(2)準拠他者が自我に対して広げる“非規範的影響”の範囲——を反映する範囲
- (2-B) 規範的準拠関係性の範囲：自我が準拠他者の諸規範と諸価値を内在化した程度を反映
  - (2-B-1) コンプライアント (compliant) な準拠関係性：この状況下の個人は、彼が彼の同調から便益を受けることを期待するが故に、準拠他者の諸規範あるいは諸価値に従う。
  - (2-B-2) 同一化 (The Identification) の規範的準拠関係性：この状況下の個人は、彼が準拠他者と同一化しているが故に、準拠他者の諸規範あるいは諸価値に、同調あるいは逸脱する。
  - (2-B-3) 内在化された (The Internalized) 規範的準拠関係性：この状況下の個人は、準拠他者の諸規範あるいは諸価値を内在化している。
- (2-C) 比較準拠関係性の範囲：(1)自我が彼自身を準拠他者と比較する多くの諸次元、(2)比較から生ずる相対的不満あるいは満足の程度、(3)比較から生ずる他の黙示的そして明示的諸行動の範囲——を反映する。

(3)準拠関係性の役割の性質

- (3-A) 役割関係の準拠関係性：準拠他者の個人への影響が役割関係に限定される場合の関係性
- (3-B) 人間 (Person) の準拠関係性：準拠他者の個人への影響が役割関係に限定されない場合の関係性

個人：準拠他者によって上げられる影響の対象

(1)準拠関係についての自我の知覚

(1-A) “客観的”知覚 (“Objective” Perception) : 準拠関係性の選定された次元についての自我の知覚は、彼がこの次元を本質的に正確な様式で知覚していれば、“客観的”である。

(1-B) “主観的”知覚 (“Subjective” Perception) : 不正確な様式で知覚している場合

(2)準拠他者についての自我の Awareness (awareness)

(2-A) “役割取得” Awareness : 自我が心理学的に、彼自身の行動のための一基底として、準拠他者の準拠枠を取得する情況を示す。

(2-B) “考慮” (“Taking into Account”) Awareness : 考慮 Awareness は、自我が象徴的に準拠他者を考慮するが、その準拠枠は彼自身の行動の一基底としては用いられない情況を含む。

(2-C) 非 Awareness (Non Awareness) : 自我は黙示的あるいは明示的に準拠他者によって影響されるが、その影響は、直接的に、準拠他者についての自我の“役割取得”, あるいは“考慮” Awareness ではない。

「同一化対象の準拠関係性」に関しては、Schmitt の立論は、個人の生活史における時間的パースペクティブが不十分なのではないか？

抽象度を高めた次元で「同一化対象」と言っても、経験的にみれば、ある時点での一過性的な形で親密な間柄と、親子、夫婦の生涯を通じた愛情の絆とは分節化してみなければならない。こうした点から、時間的パースペクティブを導入して、同一化対象の準拠関係性を、(A)利他的準拠関係性、(B)短期的準拠関係性、(C)中期的準拠関係性、(D)長期的→永続的準拠関係性に分節化してみるという仮説を呈示したい。

次いで、「比較準拠関係性」についてみると、Schmitt の定義では、比較に向けてのパースペクティブ、比較の対象が、これまで「自明視してきた世界」に関するものと、「自明視された世界の意味を問い直し、再解釈しようとするもの」との2種の関係が未分節である。この理論的欠陥を克服しているものは、J. Urry による、「因襲的比較」(conventional comparisons)と、「構造的比較」(structural comparisons)という分節化である (Urry [1973: 109])。

Urry は、「因襲的比較」を、これまで個人が属してきた社会的世界の内部での比較ととらえている。これに対し、「構造的比較」では、新たな社会的世界にまで視野が広がることにより、新旧の社会的世界の比較が可能になってくる、と Urry はみる。さらに、Urry は、構造的比較

こそが、新たな社会的秩序 (new social order) の生成という可能性につながっていると主張している<sup>20</sup>。

以上の3次元に及ぶ準拠関係性の検討は、理論枠組での検討による作業仮説を積み重ねつつ、もっと具体的な経験的レベルでの実証的解明作業が不可欠である。これまで試みてきた検討は、実証作業へのあくまで1つの切り口であるにすぎない。

## Ⅶ. 翻身論における「準拠関係性変容」の意味

ここでは、今後の実証研究を射程にいれて、準拠関係性変容の意味に対し考えてみよう。

第1は、自己本来の志向性と外的情況との関連性である。現代社会においては、T. Shibutani が呈示しているように、あまりにも多くのコミュニケーション・チャンネルが我々を取り囲んでいる。我々は、遠い少年の日の想いや生き生きとした関心を、青年期、成人期以後にはぐくみ、具体的な形で結実させようとしても、ともすれば、氾濫する情報にふり回され、情況の海にのみこまればちではあるまいか？

象徴的な例をあげよう。あることを「学ぶ」、  
「修行する」ためには、〈専心〉が不可欠な要件となる。しかし、我々は、無意識的次元において、消費を不断に刺激する広告情報や、流行の影響を受けているのではないか？ 〈専心〉が不

可欠な「修行」と、「消費への誘い」とのはざ間で、葛藤する者は極めて少数の人々に限られるのだろうか<sup>22)</sup>。

消費への誘いは、自由市場経済のダイナミクスにつながっている。しかし、それへの過剰反応が、ローン地獄、サラ金地獄といった、人生の破綻に通じている側面を無視することはできない。

こうした点で、遠い少年の日々の準拠関係性が、青年期、成人期以後において、どのように変容していったのかという個人生活史上の経験的な実証研究は、社会学をもっと実践的な血の通ったものとしてゆくために重要課題なのである。

現代社会は、多元的刺激がさまざまな誘惑をもたらす。そのなかでも、とりわけ実体的勢力や目先の功利性による誘惑が、個人の想像力、長期的に持続する内的志を圧倒し、自己本来の志向性を曇らせてしまう危険があるのではないか。言い換えれば、自分自身の内的生活史から次第に明晰化してくる志向性が、外的情況、時代の流れとでも呼ぶべきものに足をとられかねないのではあるまいか。

外的情況を直視しつつ、同時に、自己固有の〈生〉の原理、志向性を情況内ではぐくんでゆくためには、「準拠関係性の変容」と「準拠他者」問題が、大きな鍵となるとみる。以上の作業仮説に対する経験的データの蓄積は必ずしも十分ではないが、筆者はつぎのような、個人生活史上の事例をすでに見い出している。これは、他律的な流れへの誘惑にからめとられ、次第に、自己の志向性が抑圧されてゆくなかで、翻身を企図した1人の編集者の個人生活史である。彼は、ある準拠他者群との出会い、準拠関係性の構築によって、かつて勤めていた出版社内部の自明性を問い直し、自己の志向性に眼を開き(明晰な意識化)、旧世界からの離脱をとげていったのである(渡辺〔1982:74-85〕)。

第2は、日本社会における自己と他者の未分離、「他者の発見」という問題に接続している<sup>23)</sup>。

例えば、母と子の深い相互準拠関係は、子どもが成長するにつれて、「母親からの自立」という実践的課題に直面する。子どもが、少年期、青年期、成人期を経て、次第に自立してゆく過程での準拠関係性変容の解明は、他者の発見、そして他者との準拠関係性形成に関する経験的調査研究を不可欠としているとみる。

## VIII. 結び——翻身の経験的調査研究に向けて

最後に、具体的な現実のなかでの経験的調査研究に向けて、作業仮説の検討を図ろう。以下の検討は、すべて、経験的調査研究によって得られた具体的データから逆照射され、その妥当性が問い直されることは言うまでもない。

第1の作業仮説は、構造的比較を欠いた、sentiment のレベルでの肯定的同一化は、自己が身をおいている状況を絶対化しがちなのではないか、ということである。逆に、ある社会的世界への肯定的同一化を欠いたままで、因襲的比較は言うまでもなく、構造的比較を単に行うならば、〈根無し草〉<sup>デランネ</sup>のような生き方になるのではないか？

第2は、翻身が起きる場合には、これまで自明視してきた現実の背後に潜むものが暴露されるという作業仮説である。この場合、A. Schutz の言う多元的現実に対してパースペクティブが切りひらかれ、そのなかのある新たな現実への肯定的同一化が行われる。必然的に、それ以前に自明視していた現実に対しては、否定的同一化が行われるケースが多いとみる。そこでは、構造的比較の果たす役割が大きいだろう。

第3は、構造的比較の促進条件としては、社会と自己の関係について矛盾を強く意識することが大きな1条件なのではないかという仮説である。言い換えれば、個人が、予定調和的な「幸福」の背後の意味を問い始め、被抑圧の情況からの脱却を志向することが1条件だとみる。

その場合に、準拠関係性に関しては、「幸福」

の背後の意味を共に感受し、個人が自明視してきた旧世界の規範、価値の解体を示唆する準拠他者の存在は重要な意味をもつ。あるいは、個人における旧世界の解体作業と新たな社会的世界への翻身に対し、支持ないし共感関係にある準拠他者の意味である。

第4は、翻身の阻害条件に関する仮説である。自己のこれまでの生き方を自明視し、主観的現実と客観的現実が予定調和的なものにとどまっていることは、阻害条件になるとみる<sup>24)25)</sup>。この仮説は、他者とのコミュニケーション問題を分析するために、もっとも重要なものの1つではないかと思われる。

#### 注

- (1) 本稿は、渡辺〔1982:74-85〕,〔1984:64-77〕の仕事に直接、接続したものである。本稿は、第56回日本社会学会(1983年10月)での報告「翻身論——R. L. Schmittの準拠他者(the reference other)論の検討を媒介に——」をもとに、拡大発展させることを企図した。報告の際、司会者の作田啓一氏から有益な助言を頂いたことに感謝する。
- (2) 生きた具体的人間に焦点を合わせた生活史研究の意義や、新たなうねりに関しては、中野〔1981〕,桜井〔1982:33-51〕,有末〔1983:345-366〕,水野〔1986:149-208〕などを参照。
- (3) 「重要な他者」という社会学的課題の体系的研究としては、古谷田〔1986〕参照。ただし、本稿では、同論文にはふれられなかった。他日に期したい。
- (4) 貝田〔1965:62〕は、「現代の日本人にとって、人間が生きるということは、天皇や国家のために生きるのではなく、神やその他の超越的な理念のために生きるのではなく、生きること自体に価値を見出すのである」と述べている。
- (5) 1977年、家族と共に屋久島に移住した山尾三省は、「野の道とは、一体感を尋ねる道のことでありと私は思っている。一体感とは、包むことと包まれることの自我が消え去り、静かな喜びだけが実在する場の感覚のことであり」と言う。山尾〔1983:16〕参照。
- (6) L. V. ミーゼスは、隷属と自由のちがいについて、「奴隷は上司が命じたことをしなければならぬが、自由な市民は自分の生き方を選べる立場にあり、これが自由の意味である」と述べている。彼は、現代の資本主義社会において、社会的移動が絶えず起こっていることを強調している(Mises〔1979→1980:34-46〕)。
- (7) Husserl〔1936→1970〕参照。
- (8) T. Shibutaniは、準拠集団概念は、客観的に存在する集団よりも、心理学的現象の説明に用いられることの方が多きを重視している。
- (9) Shibutaniは、準拠集団の選択とは、人の対人関係の関数であるとしている。
- (10) Shibutaniは、大衆社会における一貫性の欠如、矛盾は、コミュニケーション・チャンネルの多さと、各チャンネルへの参加の容易さの産物だ、としている。さらに、孤立した社会では、文化エリアはterritorial baseをもつが、産業社会では、地理的に離れていても、迅速な交通手段とマス・メディアによって、効率的コミュニケーションが可能だ、としている。
- (11) Shibutaniは、「重要な他者とは、Sullivanによれば、規範の内在化に、直接、責任を果たす人々である」、「我々が重要な他者と第1次的関係に立つとき、重要な他者は、現実に、我々の能力、価値、見解の開拓に寄与する」と言う。
- (12) Shibutaniは、大衆社会における個人の「首尾一貫しない」行為パターン(行為主体は、その事実には気がついていない)に着目している。その背景として、多くの集団への参加、多数のパースペクティブの内在化による、パーソナリティの分断を指摘している。
- (13) Blumer〔1954:3-10〕参照。
- (14) R. L. Schmittは、自己理論、役割論、シンボリック相互作用論は、sociological social psychological orientationsだとみている。Schmitt〔1972:182〕参照。
- (15) Schmittは、シンボリック相互作用論と準拠他者志向論の接続点として、社会関係における知覚

の決定的役割, すべての社会的行動の社会, 文化的性格, 言語とシンボルの重要性などをあげている. Schmitt [1972:185] 参照.

- (16) Schmitt による, 「準拠集団」, 「準拠個人」, 「準拠志向」, 「自己準拠システム」などの諸概念の, 学説史上のレビューについては, 表1参照. また彼は, 「準拠他者は, 個人の象徴的世界内での commonality を共有する. まさにこの理由ゆえに, 個人は, 人々, 集団, 社会的カテゴリー, サブ・カルチャー, 想像上の準拠他者, さらに物理的次元での対象にすら志向するのである」と述べている. Schmitt [1972:177] 参照.
- (17) 「否定的な準拠他者」という問題に対するアプローチとしては, バランス理論 (balance theory), レイベリング論 (labeling theory) などがあげられている. Schmitt [1972:187] 参照.
- (18) H. H. Kelley, T. Shibutani による準拠集団および, その機能に関する定義は, 表1. 参照.
- (19) Schmitt による, これらの類型論については表2. 参照.
- (20) Schmitt は, 「これまで, 比較準拠関係性が, 社会システムによって構造化されているプロセスと条件が無視されてきた」と言う. 彼は, comparative, normative, identification という3次元による, 自己の発展プロセスに対する相対的検証を提唱している. Schmitt [1972:186] 参照. 筆者は, 今後の実証研究によって, 以上の課題点の解明をめざしている.
- (21) J. Urry の論考に関しては, 本稿ではその一端への言及にすぎない. Urry は, 社会の矛盾する客観的構造こそが, 構造的比較の契機になってくる, と

言う. 彼は, 社会学では, 矛盾 (contradiction) という概念を, 緊張 (strain), 逆機能 (dysfunction) という不満足な概念で代替させてきた, と批判している. 社会の多様な構造的矛盾の存在と, これらの矛盾がいかにして拡大, 累積してゆくのかをめぐる研究こそが, 「社会問題」の研究として重要だ, と問題提起している. Urry [1973:179] 参照.

- (22) 産業社会における「消費志向」の問題に対しては, 近年, 多様な問い直しが試みられている. 例えば山本 [1983] 参照.
- (23) 自己と他者の未分離という問題については, 土居 [1971] 参照.
- (24) 本稿で検討を加えてきた, とくに Schmitt の論考は, 体系化を志向した研究であるだけに, 抽象度が高く, 準拠集団論に関する膨大な文献レビューに基づいている. 「抽象度を高めた理論次元」という土俵にあえて乗って, 筆者なりに格闘したものの, Schmitt からは〈示唆される点〉と, 〈彼の論点の不明確な点〉の双方を実感している. 具体的な実証研究にとって, 抽象度を高めた理論は, データを分析, 解釈するための「道具」であるとするならば, できる限り, 実証のフィールドへ入って, 作業仮説の検証を図ってゆきたい.
- (25) 本研究を進める過程では, 「役割論研究会」の席上, 石川洋明, 奥山敏雄, 坂本佳鶴恵, 立岩真也, 宮台真司氏から, 社会学的理論をめぐり多くの刺激を受けた. Schmitt の抽象度の高い理論構成をしばしばもてあまし気味であった際, 水野節夫, 古谷田早苗氏からは, 細部にわたって有益なコメントをいただいた.

## 文 献

- 有末賢 1983 「生活史研究の視角」『慶応義塾創立125年記念論文集』.
- Berger, P. L. 1963 *Invitation to Sociology*, Doubleday & Company Inc. =1979 水野節夫・村山研一訳『社会学への招待』思索社.
- Blumer, H. 1954 "What is Wrong with Social Theory?" *American Sociological Review* 19.
- 土居健郎 1971 『「甘え」の構造』弘文堂.
- Freud, S. 1921 "Massenpsychologie und Ich-Analyse" = 「集団心理学と自我の分析」『フロイト著作集』第6

巻, 人文書院.

船津衛 1976 『シンボリック相互作用論』 恒星社厚生閣.

—— 1980 「準拠集団論」『基礎社会学第I巻』 東洋経済新報社.

Husserl, E. 1936 Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Ph nomenologie =  
1970 細谷恒夫訳 「ヨーロッパ学問の危機と先験的現象学」『世界の名著』51, 中央公論社.

Kelley, H. H. 1968 “Two Functions of Reference Groups” in Hyman, H. H. & Singer, E (eds.), Readings in Reference Group Theory and Research, Free P.

Klapp, O. E. 1969 Collective Search for Identity, Holt, Rinehart and Winston.

古谷田早苗 1986 「ライフ・オリエンテーションと『重要な他者』」(法政大学社会科学研究所社会学専攻60年度修士論文).

貝田宗介 1965 「日本人の人生観」『現代日本の精神構造』 弘文堂.

水野節夫 1986 「生活史研究とその多様な展開」青井和夫監修『社会学の歴史的展開』サイエンス社.

Mises, L. V. 1979 Economic Policy: Thoughts for Today and Tomorrow, Regnery & Gateway = 1980 村田稔雄訳『自由への決断』 広文社.

中野卓 1981 「個人の社会的調査研究について」『社会学評論』125号(32-1).

桜井厚 1982 「社会学における生活史研究」『南山短期大学紀要』10.

作田啓一 1980 『ジャン-ジャック・ルソー——市民と個人』 人文書院.

—— 1981 『個人主義の運命——近代小説と社会学』 岩波書店.

Schmitt, R. L. 1972 The Reference Other Orientation, Southern Illinois U. P.

Shibutani, T. 1955 “Reference Groups as Perspective” American Journal of Sociology 60.

椎野信雄 1978 「G. H. ミードの社会心理学」『ソシオロギス』No. 2.

Strauss, A. L. 1959 Mirros and Masks: The Search for Identity, Free P.

竹内成明 1980 『闊達な愚者——相互性のなかの主体』 れんが書房新社.

Turner, R. H. 1956 “Role-Taking, Role Standpoint, and Reference Group Behavior” American Journal of Sociology 61.

Urry, J. 1973 Reference Groups and the Theory of Revolution, Routledge & K. P.

山本哲士 1983 『消費のメタファー——男と女の政治経済学批判』 冬樹社.

山尾三省 1983 『野の道——宮沢賢治随想』 野草社.

渡辺牧 1982 「志向性の社会学序説——ある編集者の生き方をめぐって——」『ソシオロギス』No. 6.

—— 1984 「翻身論序説——日本ファシズム期におけるあるジャーナリストの生き方の事例分析を中心に——」『ソシオロギス』No. 8.

——文献挙示は〈ソシオロギス方式〉による——